

第13回

西宮湯川記念賞贈呈式



平成10年11月5日 午前11時30分～12時

西宮神社会館

主催／西宮湯川記念事業運営委員会・西宮市・西宮市教育委員会

受賞者のプロフィール

※ 受賞者



くさ の かん や
草 野 完 也

- 昭和34年(1959)6月13日生まれ
- 昭和57年(1982)3月 北海道大学理学部物理学科卒業
- 昭和59年(1984)3月 広島大学大学院理学研究科(博士課程前期)修了
- 昭和62年(1987)3月 広島大学大学院理学研究科(博士課程後期)修了
- 〃 6月1日 広島大学理学部物性学科助手
- 平成8年(1996)4月1日 広島大学理学部物性学科助教授
- 平成10年(1998)4月1日 広島大学大学院先端物質科学研究科助教授

※ 受賞研究

「電磁流体力学的最小エネルギー原理に基づく太陽フレア発現機構の研究」

※ 受賞理由

太陽フレアは太陽コロナ磁場中に蓄えられたエネルギーが爆発的に解放され熱エネルギーに変換される現象であると考えられてきたが、何故そのエネルギー解放が爆発的に発現するかという問題は太陽物理学における最も重要な課題として残されてきた。草野完也氏はこの問題に電磁流体力学的最小エネルギー原理に基づいて理論的ならびに計算物理的に取り組み、解の分岐という概念をコロナプラズマに導入することによって、「分岐遷移フレアモデル」を提唱した。この理論によって太陽フレアにおいて磁気再結合が不可避免的に生じることを示し、太陽フレアの発現機構を物理的に自然に説明することに成功した。

我国の太陽観測衛星「ようこう」(1991年打ち上げ)による観測によって、太陽フレアの発現機構が磁気再結合とそれによる電磁流体力学的ショックであるとする確かなデータを得たと報告している。これは草野理論の正当性を支持するものである。

太陽物理学の最重要課題の研究が、我国の研究者によって理論、観測両面において大きく前進させられたことを大いなる喜びとする。

湯川秀樹博士が、日本人として初めてノーベル賞を受けられた「中間子論」を提唱されたのは、苦楽園にお住まいの時でした。

それから50年を経た昭和60年に博士の門下生の方々が中心となって、「中間子論誕生記念碑」を苦楽園小学校校庭に建立されました。その碑文には、博士の著書「旅人」から「未知の世界を探究する人々は、地図を持たない旅人である」という言葉が、刻まれています。

西宮市では、これを契機に中間子論が本市で誕生したことを41万市民をはじめ内外に広く知っていただくとともに、文教都市西宮の誇りとしていたいと考え、昭和61年から「西宮湯川記念事業」を実施しています。

この事業は、市民の方々に理論物理学を平易に解説し、基礎科学に対する正しい認識と、学生・生徒の科学する心を養うための「西宮湯川記念講演会」と、次の理論物理学を担う若手研究者の研究奨励を目的に、顕著な業績を修められた方に贈呈する「西宮湯川記念賞」、研究者による研究発表と討論のための「西宮湯川記念理論物理学シンポジウム」で構成されています。

この事業を通じて湯川博士の「真理を探究する心」と「平和への願い」が一層市民生活と教育実践の中に強く継承されることを念願しています。

| | |
|------------------|--|
| 明治40年 (1907) | 父琢治、母小雪の三男として東京麻布に生まれる (1月23日) |
| 昭和4年 (1929) 22歳 | 京都帝国大学理学部卒業 |
| 昭和8年 (1933) 26歳 | 苦楽園の新居に居住 |
| 昭和9年 (1934) 27歳 | 中間子を予言。日本数学物理学会で講演、論文「素粒子の相互作用Ⅰ」(中間子論第Ⅰ論文)を投稿 |
| 昭和10年 (1935) 28歳 | 同論文を日本数学物理学会欧文誌に掲載 |
| 昭和14年 (1939) 32歳 | 京都大学教授となる |
| 昭和15年 (1940) 33歳 | 甲子園口に転居 |
| 昭和18年 (1943) 36歳 | 京都に転居 |
| 昭和24年 (1949) 42歳 | 核力に関する中間子理論によりノーベル物理学賞を受ける |
| 昭和30年 (1955) 48歳 | ラッセル・アインシュタイン宣言の共同署名者となる。下中弥三郎氏・芽誠司氏らと世界平和アピール七人委員会を結成 |
| 昭和56年 (1981) 74歳 | 京都下鴨の自宅で永眠 (9月8日) |



苦楽園小学校校庭に建立された「中間子論誕生記念碑」